

徒然なる日記121019～過疎が進むこと～

E-book推進協会

過疎が進むこと

過疎化が進む。限界集落ができる。何とかしなければと奮起する人がいる。なかなか改善しないが、一生懸命知恵を絞る。

すばらしいことだと思う。日本人の英知を結集すれば、過疎化に代表される超高齢化社会も乗り切れるだろう。

と、無責任な日本礼賛だが、半ば皮肉でもある。さまざまな地方で若い人がいなくなり、高齢者ばかりが住む。若い人の声、姿がないという。「若い人を呼び戻さねば」という危惧が聞こえてくる。

でも、若い人が相対的に少ないのだから、そもそも無理な話ではないか。たとえば、たまたま今日テレビでやっていたが、大学卒業後陸前高田市に移住し、若い人が住める町を、活気ある町を目指したいと意気込む23歳がいた。

意気込みはすばらしい。活気ある町というのもいい。でも若い人がその町を出るのにはいろいろな理由がある。若い人にとって、より魅力的な町が地元の外にあるならどんどん外に出て、外の文化、空気を吸い込んで、成長すべきだ。そのほうが、地元に残り続けるよりよっぽど、その人個人はもとより、世界全体のためになる。

むしろ、地元に残ってもらわないと、という考えに凝り固まることは良くない。

生まれ育った故郷は心のふるさととして胸に秘めるとして、視点は常に外に向いたほうがいい。世界に目を転じれば、若い人なんていくらでもいる。むしろ求められているのは、過疎が進む地に住む高齢者が、外国人をはじめとする「よそ者」を受け入れる覚悟ではないか。

文化が違う、肌が違う、さまざまな違いを受け入れる用意がある町。それが過疎化を救う鍵になると思う。

今日やっていたテレビを見ながら、いつも思っていることをふとまとめてみた。

世界のいわゆる途上国の多くは若い人のほうが多い。日本の人口構造とは逆だ。国はいずれ減っていく。国の分け隔てが減じる。そうした世界はいずれ来る。そう遠くない。過疎化が進む町を多く抱える日本自体の覚悟が必要だ。

2012年10月19日記す